

## クルド—翻弄の歴史と現在—

松 浦 範 子  
(写真家)

クルド人はご承知のとおり、「国を持たない民族では世界最大」といわれる中東の先住民族です。その居住地域は、クルド人の土地との意味で「クルディスタン」と古くから呼び慣わされてきました。しかし現在そこは、トルコ、イラン、イラク、シリアなどの領土にまたがり、それらの国に分割、併合されたかたちとなっています。そのためクルドの人々は、どの国においてもマイノリティーの立場に置かれ、不遇の境遇に留め置かれてきました。不満を抱いたクルド人たちの間では

抵抗運動が沸き起こり、それはたびたび国家との紛争へと発展しました。また国境の錯綜する地帯に根を張る彼らの存在は、時に大国の思惑とも相まって周辺国の駆け引きに利用され、中東地域の大きな不安定要因の一つにもなっています。

私が写真家としてそんなクルディスタンを繰り返し訪ねるようになったきっかけは、トルコ東端の町で、クルド人の若者たちから生きる隘路を聞かされたことでした。彼らの背後にある問題についてももっとよく知りたい。正史に名を残すことの



▨ 歴史的にクルド人が居住している地域（クルディスタン）

ない一人ひとりと向き合い、小さな声に耳を傾けながら、彼らの素顔を見つめてみたい——。

### 何を知るか伝えるか

長い道のりを経て彼の地に辿り着けば、たくさんクルド人たちが「この土地で起きたことを伝えてほしい」と話しかけてきました。トルコ東部の山間部を訪れてみると、そこには弾痕でハチの巣状になった、あるいは軍隊に焼き払われて廃墟となったクルドの村が至る所に点在していました。ある時その様子を含めバスの中から撮っていると、同乗していた老人が無言で握手を求めてきました。またある時は「撮った写真を日本の新聞で発表してくれ。こんな目に遭っているというのに誰も来てくれない」と訴える人とも出会いました。そして「人間らしく扱われること、人間として生きることを望むだけだ」と語るのを何度も耳にしました。武装した反政府組織と政府軍との戦闘に巻き込まれて命を落としたある人物（こうして匿名で申し上げるのは、現地の人びとに累が及ぶ可能性がまだあるからです）の家族は、「話を聞きに来てくれてありがとう。私たちのことを知ろうとしてくれてありがとう」と言って、町に銃弾の雨が降った日のことや、ゲリラ活動を疑われて連行された後、山で死体となって発見された高

校生の息子のことなどを涙ながらに語ってくれました。古の時代より数々の詩や歌に詠まれてきた山河を愛で、訪れる者を砂糖のたっぷり入った甘い紅茶で歓迎してくれる心優しい人々の背景には、あまりに厳しい現実があったのです。

その一方で、あるクルド人青年のこの言葉も忘れることができません。「心の原点は故郷にある。だからぼくたちはずっとここで生きてゆく。あなたにはそのいいところだけを知ってもらえればそれでいい」。そして彼らは、歌や踊りを愛し、ユーモアを大切にする心や、旅人を篤くもてなす習慣を存分に見せてくれました。「苦難や悲劇は確かにある。でもそれは事の一面でしかない。私たちの知恵と勇気、有形無形の文化にも、もっと目を向けてもらいたい」と。

彼らは、世界の人びとに対してこう願っています。「自分たちの本当の姿を知ってもらいたい」。誤解や偏見に苛まれてきた彼らはまず、理解を必要としているのです。

取材するなかで、私が主に焦点を当ててきたのは、こうしたごく普通の生活者としてのクルド人たちです。クルド人の独立や自治を目指しての、長きにわたる政治的な試みや武装闘争については多くの解説がなされてきました。しかしそれとは別に、一般のクルド民衆の身にいったい何が起



写真① 村人たちの食卓



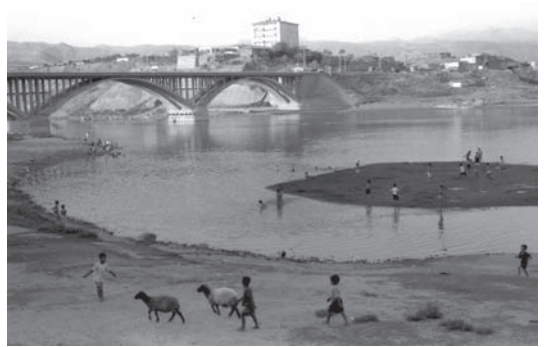
写真② 新年の祭りで披露されたクルドのダンス

こったのか、彼らがどのような目に遭い、その時  
いったい何を目撃し、何を思い、どう行動したの  
か。そして彼らはそれらのことを、たとえば私の  
ような外部の人間に対して、何をどう語り、伝え  
ようとするのか。そういったことに私は関心を寄  
せて取材を続けてきました。

ですからこれから申し上げることは、学術的な  
研究成果や、自治や独立に向けたムーブメントの  
分析といったものではありませんが、クルド人が  
どういう人たちであり、クルド人問題がどういっ  
たものであるか。そのご理解の一助となれば幸い  
です。

### クルド人の住む土地

クルド民族の総人口は、2500万人から3000万人  
ほどと推定されています。彼らが暮らしているの  
は、主にトルコ、イラン、イラク、シリアなどの  
国境が接する地域で、トルコ領内にクルド人全体  
のおよそ半数の1500万人が、イランに600万、イ  
ラクに400万、シリアに300万人ほどが暮らして  
います。その他アゼルバイジャンやアルメニアと  
いった旧ソ連領の一部や、レバノンなどにもクル  
ド人は住んでいます。その面積は全体でおよそ50  
万平方キロ。日本の国土のおよそ1.5倍に相当す  
る広さです。そこでは人の流れを阻む険しい山岳



写真④ ジズレ市（トルコ）を流れるチグリス川

地帯や、草に覆われたなだらかな丘陵地、平野や  
土漠など、さまざまな地形と風景が見られ、冬季  
の高地では氷点下30度まで下がる一方、トルコ、  
シリア、イラクの国境が接する夏の平野部では極  
度に乾燥し摂氏50度にも達します。

この地は天然資源が豊富で、石油や石炭などさ  
まざまな資源が眠っています。しかし何といても  
も重要なのは、豊富な水資源です。古代メソポタ  
ミア文明を育んだチグリス、ユーフラテス川の源  
流は、トルコ領内のクルド人居住地域にあり、次  
第に大河となってディヤルバクルやジズレといっ  
たクルド人の主要な都市を貫き、シリアやイラク  
へと流れ行きます。その豊富な水は、クルディス  
タンの人びとに生活用水と肥沃な農地をもたらし  
てきたばかりでなく、大規模なダム建設によって  
水流をコントロールするトルコ政府にとっての重  
要な外交手段としても利用されてきました。

古くからその土地で部族社会を形成し、部族単  
位で遊牧生活を送っていたクルドの人々ですが、  
歴史の移ろうなか、オスマン帝国やペルシア、ア  
ラブといった大きな勢力の狭間で改革、「近代化」  
の波に圧され、定住化が進んだことから部族社会  
は崩壊していきました。現在でもイランやイラク  
の一部の地域にクルド人部族がわずかに存在して  
いますが、その規模は年々縮小しています。

今でもクルド人たちは農業や牧畜を主な生業と



写真③ 山の斜面に点在する石積みの家々



写真⑤ 放牧地に張ったテントで夏を過ごす



写真⑥ 天然素材の手製靴はホウラマン地方の特産品



写真⑦ 国境貿易を生業とする人たち

していますが、現在では、夏の間だけ決まった高原でテント暮らしをしながら山羊や羊を放牧し、秋になると家畜を連れて村に戻るといった半遊牧生活が広く行われています。一方、家畜を飼うこと

も畑を作ることも難しいような険しい山岳地帯の村々では、天然素材のみを用いた靴や織物などの手工芸品が大切な収入源となっています。また国境地帯では国を超えた交易も盛んです。近代産業の立地し難い山地ということもあり、現金収入を得られる手っ取り早い仕事として多くの人が携わり、その規模は税金の安いドバイに集積される世界各地からの物資を大量に買い付けるといった大がかりなものから、背中に荷物を背負って徒歩で山を越え日銭を稼ぐといった素朴なものまで実に様々です。この仕事で成功を収める人も多く、なかには大金を手にする人もいます。

宗教的にはどうでしょうか。その昔ゾロアスター教（拝火教）を信仰していたものと考えられていますが、現在では多くがイスラム教スンニ派に属しています。ただし地域によっては、イスラム・シーア派やキリスト教、アレヴィー教、イエジディー教などを信仰している人たちもいます。

彼らの母語であるクルド語は、インド・ヨーロッパ語族のペルシア語に近い言語で、地方によってケルマンジ、ソラニー、ザザなど、いくつもの方言に分かれています。ゾロアスター教の聖典『アヴェスター』に記された古代言語ときわめて近いホウラミーや、イエス・キリストが話していたとされるアラム語をもととするシリア語が使われている地域もあります。固有の文字はなく、



写真⑧ イラン・イラク国境地帯特有の民族衣装

トルコではラテン文字、イランやイラクではアラビア文字といったように、それぞれの国の文字が用いられています。

また民族衣装や舞踏、音楽も、地域ごとにそれぞれの特徴が見られ、実に多様性に富んでいます。

クルド人には3月21日（20日の年もある）の春分の日を、新しい年の始まり「ノウルーズ（地域によってネウルーズ、ネブロスなど少しずつ呼び方が違う）」として祝い、焚き火の上を飛び越えたり、そのまわりで踊ったりしながら過ごす慣わしがあります。ゾロアスター教の名残とも見られるこの行事は、イランや中央アジアなどの広い範囲で見られますが、とりわけクルド人たちは、その起源をクルド民族発祥にまつわる、暴君からの解放と自由の獲得を描いた英雄伝説にあるとして、大切に守り継いできました。

### 抑圧と抵抗の始まり

ところが近代に入ると、トルコなどでクルド人の新年の祭りは禁止され、厳しい取り締りの対象とされました。それに対し、クルド人たちは数々の理不尽な抑圧への反発から民族性を意識し始めます。英雄伝説と新年の祭りを自らの存在を示す一つの表現手段として位置づけ、時に体制への抵



写真⑨ 晴れ着を纏い火を焚き新年を迎える

抗運動や武力闘争の旗印としても用いては、各地で祭りを強行し、そのたびにことごとく弾圧されたのでした。

クルド人たちはつい最近まで、新年祭に限らず、民族的な権利を求める政治活動はもとより、クルド語の使用、伝統音楽や舞踏といった民族固有の文化活動が認められていませんでした。

なぜならクルド人を内包する国の政府は、クルド人が民族という同胞意識のもとに結束し分離・独立要求することを警戒したからです。クルド民族は規模も大きく、国境地帯という政治的にも軍事的にもきわめて重要な、しかも水資源や鉱物資源の豊富な地域に暮らしています。政府はそんな彼らを抑え込み、コントロールする必要があったのです。

### 熾烈なトルコ国家の弾圧

それでは、各国のクルド人の現状と過去の歴史について、トルコとイラクを中心にもう少し詳しく述べさせていただきます。まずはクルド総人口のおよそ半数が暮らすトルコについてです。実はクルド人内包国家の中でもとりわけ問題が深刻とされてきたのが、このトルコでした。

トルコ共和国は、1923年の建国以来、単一民族国家を国是としてきました。実際はトルコ領内にはトルコ人のほかに、クルド人やアラブ人、そして数多くの少数民族がモザイク状に混在しています。しかし建国の父と称される将軍ムスタファ・ケマルは、初代大統領に就任するやいなや、民族的な差異からバラバラに分裂しかねない領土を一つに束ねるべく、「トルコ国家はトルコ人とトルコ文化のみで構成される」との理念を打ち立て、そのスローガンをもとに、使用言語はトルコ語のみとし、それ以外は固く禁じるなど、厳しい同化政策を推し進めました。

国民の20～25%を占めるクルド人については、

政府は特に目を光らせて監視し、クルド人を「山岳トルコ人」と呼ぶことでその存在を完全に否定。クルド語の使用から、歌や音楽や踊り、民族衣装の着用まですべてを禁止し、違反した者には国家反逆罪が科せられました。民族的・文化的に均一な統一国家の建設には、異文化の存在は脅威であるとしたからです。

そもそも現実とはかけ離れたこの同化統合政策のもと、クルド人たちは激しく反発し始め、大小さまざまな抵抗運動が起こりました。中でも1980年代にクルド民族の解放を求めて武装蜂起した非合法組織「クルディスタン労働者党」(PKK)は、トルコを大きく揺るがしました。

その中心人物としてPKKを率いたのが、党首アブドゥラ・オジャランです。アンカラ大学で政治を学んでいた頃にマルクス・レーニン主義の洗礼を受け、左翼思想に傾倒していったオジャランは、1978年に同党を立ち上げ、1984年に本格的な武装闘争を開始します。はじめはトルコ東部の山岳地帯でトルコ政府軍の待ち伏せ攻撃を繰り返していましたが、86年頃からは攻撃の対象を都市部にまで広げ、軍事施設や警察署を主なターゲットとし、さらには外国人の誘拐や政府の役所や観光地まで襲撃することで、民族解放運動を広くアピールしました。

それに対しトルコ政府は、分離主義、テロ行為には絶対に屈しないという強硬な姿勢で、年間70～80億ドルとも推測される予算を費やし、大量の兵器と兵士を投入。その圧倒的な軍事力をもって、PKK弾圧に血道を上げてきました。

ゲリラ活動に加わった者がいれば、政府軍はその家族に対し「捕まえて国家に引き渡すように」と要求し、それに逆らえば、赤ん坊から老人までの一家全員が丸ごと拘留されました。PKKゲリラに食事や寝床を与えたりすれば、それだけで「テロリストを支援した」とみなされて投獄され、生死にかかわるほどの拷問にかけられました。



写真⑩ 爆破されたクルドの村

それと同時にトルコ政府は、クルド人社会に密告者を潜ませ、報酬を与えて身内や近隣の仲間たちを見張らせたり、クルド人からリクルートした民兵を厚待遇で雇い、武器を支給して対ゲリラ戦の現地人部隊として利用したりもしました。密告者の存在は身近な相手に猜疑心と恐怖心を起こさせ、同胞意識を分裂させる大きな要因となりました。また民兵の出現は、政府側と反体制側に分かれたクルド人同士の血で血を洗う争いの発端にもなりました。そうして政府は、クルド人社会の内部分裂を図り、団結を阻む作戦をも推し進めてきたのです。

さらに政府軍は、ゲリラの温床となり得る村を廃村とするために、山間部の村人たちを強制移住させ、村を焼き払いました。破壊された村の数は3,700を数え、強制退去させられたクルド人の数は350万人にもものぼるといわれています。そうして村を追われた人々は、行き着いた先の町でも、苦汁をなめさせられました。差別や蔑視にさらされ、危険な野蛮人と決めつけられたり、病院で「汚いから」と診療を断られたり、学校でクルド人と知れた途端に成績を低く評価されたりしたのです。また定職に就けず雑業に従事する親に代わり、子供が学校も行かずに靴磨きなどで家計を支えている家庭も少なくありません。さらには、移住先においても国の警官たちに監視され続け、集

会を開いただけで、装甲車で乗り付けた警官たちに乱暴されることさえありました。

そうした人権侵害や弾圧の実態を伏せておくために、政府は厳しい報道規制を敷き、住民以外の入域や移動を極力制限してきました。80年代から90年代にかけて非常事態令下にあったクルド人地域には、膨大な数の検問所が設置され、通過する者たちを監視すると同時に、報道関係者や人権団体の立ち入りを阻止しました。厳しい検閲が行われ、政府の意に反するものは、すぐさま発行禁止処分となり、秘密裏にクルド語で発行していたある新聞社はビルごと爆破されました。クルド問題を取材した内外のジャーナリストたちが、拘束されて拷問を受けたり、殺害されたりという事件は、後を絶ちません。そして彼らの取材に応じて口を開いたクルド人市民たちも、国益に反する行為を犯したとの理由で、同様の目に遭わされてきました。

クルド人をめぐる弾圧・抑圧はこうして長きにわたり行われ、エスカレートしていきました。国家権力を恐れて口を閉ざし、生きていければ理不尽な仕打ちや暴力にもただじっと耐えることを、クルド人たちは強いられてきたのです。立ちあがった人も大勢いました。残された途は戦うことだけだと山に入っていった人たち、武器を取るのではなくあくまでも合法的な非暴力の手段を選んだ人たち。しかしそのどちらも、徹底的に弾圧されました。

ある祭りの会場で、群衆が二人の男性の顔が印刷されたカードを手に手に振りかざしているのを見たことがあります。二人はクルド人政党のメンバーで、警察に連行された後、行方不明になってしまったとのことでした。そうしたケースはここでは非常に多いのです。祭りの最中とはいえ、クルド人が大勢集まると、こうした政治集会のような色を帯びることがしばしばあります。それだけ彼らは多くの問題を抱え、憤懣やるかたない思い



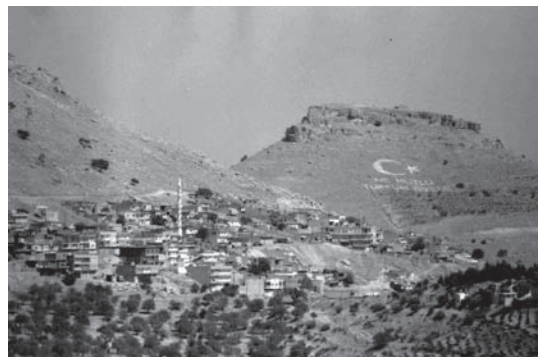
写真⑪ 沸き起こる権利要求の声

でいっぱいなのです。

そうしたクルド人の怒りや悩みが深い地域であるほど多く見られるのが、山の斜面に大きく書かれたトルコ政府のスローガンです。「トルコ人、と言えることは、なんと幸せだろう」。トルコ人が平穏に暮らしている地域で、これを見ることはほとんどありません。

#### かすかにさす光明

かつて栄華を誇った歴史ある街イスタンブールやカッパドキアの奇観、ギリシア時代の遺跡を目当てに世界中から観光客が押し寄せるトルコ。その裏では、こうした問題がこの国に暗い影を落と



写真⑫ 山の斜面に白い小石を並べて書かれたスローガン



写真⑬ 祭りの会場で人権を叫ぶ人びと

しています。

PKK を率い、そのカリスマ性で多くのクルド人の注目を集めてきたオジャランは、1999年にケニアで拘束され、本国へ送還後、一旦は死刑宣告を受けたものの、法律改正により終身刑に減刑され、現在もイスタンブールの沖合に浮かぶ監獄島に拘禁されています。オジャランを失った PKK は停戦宣言を出し、その後は内部分裂などを繰り返しているとの見方が強まっています。

その後、クルド人を取り巻く状況は、少しずつ改善されつつあり、住民を圧迫する検問はずいぶん減り、2000年にはクルド民族の新年を祝う伝統行事も解禁になりました。2002年8月には、クルド語教育と放送の解禁、言論・表現の自由、死刑

制度の廃止などを謳った14の改革法案が可決され、その年の11月にはディヤルバクルとシュルナックの両県に出されていた最後の非常事態令が15年ぶりに解除されることとなりました。村を追われた村人たちの帰還も始まっています。

そこにはトルコ政府のEU加盟に向けた民主化と人権問題への積極的な取り組みをアピールする狙いがあるとの見方が有力ですが、それでもくたびれ果てた人びとの多くが現在の動きを歓迎しています。

しかし今でも問題は山積しています。PKKに傾倒し、ゲリラ・キャンプに加わろうという人々は、今も少なくありません。そして、クルド人地域の山岳地帯での掃討作戦は引き続き行われており、こんにちもクルド人の生命や平安な暮らしは脅かされ続けているのです。

#### 化学兵器を用いたイラク軍の攻撃

次はイラクをみてみましょう。現在、世界で唯一、クルド人の政府が存在するのが、このイラクです。イランに暮らしているあるクルド人社会学者はこう言っています。

「PKKの闘いは、クルド民族の存在と問題を世界に知らせることにはなった。だが、クルド人にとって今世紀最大の成果と言えるのは、イラク北部での自治政府の樹立だ」

現在では体制を恐れながら暮らさなければならぬということはありませんでしたが、イラクでも長い間、クルド人勢力と中央政府との間で激しい戦闘が繰り返され、民族的マイノリティーであるクルド人は大量殺戮や強制移住などの憂き目に遭ってきました。イラン・イラク戦争末期には、自国の軍隊に毒ガスで攻撃され、あまたの一般市民が犠牲となっています。その悲劇の記憶から、しばしばこんな声が聞こえてきます。

「日本人とわたしたちクルド人は、悲惨な出来



事を経験した兄弟です。クルディスタンは『第二のヒロシマ・ナガサキ』です」

それでは、この映像（DVD）をご覧ください。これはイラン・イラク戦争末期の1988年3月に北イラクのクルド人の町、ハラブジャとその周辺の様子を、イラン軍の兵士が撮影したものです。（当時の一時期、その一帯はイラン軍の占領下にあった）

春が訪れたばかりの農村地帯に、無差別に無数の爆弾が落とされ、大量の煙があちこちから上がっています。これがイラク軍による、クルド人に向けて行われた化学兵器攻撃です。目撃者の話によると、煙は黄色っぽい色をしていて、ニンニクのような、あるいはリンゴの腐ったような臭いがしたといます。米国の人権団体の調査で、使われたのは神経を麻痺させるガスの一種サリンと皮膚や呼吸器に炎症を起こすマスタードガスの混合ガスだったことがわかっています。

映像には、緑の草原を貫く一本道の傍らで毒ガスを浴びて行き倒れたたくさんの遺体が映し出されていますが、彼らはハラブジャからイランへと通じるこの道を伝って、イラク軍の砲撃からイランへと逃れようとしていたのです。そして町にはさらに多くの人間や動物たちの死体があふれていました。赤ん坊を守ろうと覆いかぶさるようにして倒れている親と子、トラックの荷台で折り重なるようにして死んでいる大家族……。彼らは皆、この一帯で普通の暮らしを営んでいた農民や商人や職人であり、老人や女や子供たちです。この日ハラブジャの町だけで、こうしておよそ5千人の市民が犠牲となりました。

ハラブジャは、化学兵器攻撃において人類史上、最大規模の犠牲者を出したことから、今ではクルド人の悲劇の象徴として広く知られています。しかし実はその一年も前から、イラク軍はクルド人に化学兵器を使用し、イラク国内だけでも8回にわたり60以上の町や村を攻撃していました。

### “民族浄化作戦”のつめあと

それぞれの町で復興が進んでいますが、身体に及ぼす毒ガスの影響は現在に至っても深刻です。視力障害や、皮膚の炎症、不妊、死産や奇形、ガンなどが異常に高い確率で発生しています。その影響は生存者だけでなく、子孫にまで及んでいることが報告されています。また、いまだ土壤の汚染除去作業は行われておらず、今もお汚染された水やその土地で収穫された農産物は、住民の健康を蝕み続けているのです。

サダム・フセイン政権による化学兵器攻撃は、クルド人の反乱に対する鎮圧作戦というよりは、民族浄化を意図した「アンファール作戦」の一環として実行されたものでした。化学兵器の使用以外でも大々的に行われたクルド人大量虐殺の実態は、ようやく明らかになりつつあるところですが、生存者の証言によれば、村が突然イラク軍に包囲され、住民全員がバスやトラックでイラク南部のスグラ・サルマンやサマワといった砂漠地帯のキャンプ地へと送られた後、いわれのない拷問が続き、目の前でたくさんの仲間たちが死んでいったということです。そうして、イラク領内にあったクルド人の村5千のうち4千5百が破壊され、およそ18万2千人が殺されました。キャンプ



写真⑭ 白血病の子供。化学兵器の影響との見方が強い

地付近やキルクク郊外の砂漠では、あちこちからたくさんの遺骨が見つかっています。大量虐殺から20年の歳月が経った今も、いまだ何の情報も得られないまま家族を探し続けている人の数は膨大で、クルド自治政府は適切に対応できないといった状況です。

### 幻のクルディスタン人民共和国

イランにも約5百万のクルド人が暮らしていますが、シーア派イスラムを国教に据えたこの国のなかで、スンニ派が主流のクルド人は、民族と宗派という二重の意味で少数派の立場に立たされています。

第二次世界大戦後の1946年、かねてより知識人たちの間で自立の気運が高まっていたイラン西部の町マハバドで、ソ連の後ろ盾を得て小さなクルド人の国「クルディスタン人民共和国（通称マハバド共和国）」が樹立されたことがありました。しかしソ連軍は、イラン中央政府から石油権益を取り付けるやいなや撤退。共和国は建国から11カ月でイラン軍の侵攻を受けて崩壊し、初代大統領をはじめ閣僚たちは公開処刑されました。

時を経て、1979年のイスラム革命成立後の混乱期には、ホメイニ師率いる新政権との間で自治権をめぐり対立。以後、激しい争いが断続的に繰り返

広げられました。1979年8月に米国のUPI通信社が配信した写真（翌80年のピューリッツァー賞のニュース写真部門を受賞）は、その当時の、イラン政府の処刑隊が一行に並べたクルド人を至近距離から銃殺する瞬間をとらえたもので、世界に大きな衝撃を与えました。

また革命の翌年に勃発したイラン・イラク戦争においては、国境地帯に居住する両国のクルド人たちが戦闘に巻き込まれ、イラク軍の爆撃や化学兵器攻撃により多くが犠牲となりました。

そうした中、クルド人勢力と中央政府との間には自治に関する秘密裏の会談が計画され、交渉団を通じて幾度かの協議が行われてきました。しかしその最中にアブドゥルラフマン・ガッセムローラクルド側の代表団が暗殺され、その事件の真相は今もなお闇に包まれたままです。その後、停戦が合意され、現在では大きな混乱は起きていません。しかしクルド人に対する官憲の目はなおも厳しく、平等・公正な選挙が行われていないことや、多数派であるペルシア人に比べて二級市民の扱いを受けていることなどに、人々は不満を抱えています。

### 奪われた市民権

最後にシリアです。この国にも300万を超えるクルド人が主に北部の地域に暮らしています。ここでは、何世代も前からその地で市民生活を送っているにもかかわらず、クルド人であるがゆえに市民権が得られず、高等教育や十分な医療を受ける機会や、不動産などの財産を自分名義で登記する権利がないなどの不平等や差別を抱えています。他にも、クルド人の農地への大規模なアラブ人入植政策や、クルド人の権利を謳う政治活動が認められない、アラブ人との間には差別化が図られているといった不遇を、クルド人たちは嘆いています。



写真⑮ 政府軍との戦闘に倒れた家族の肖像

## 国家間の危ういバランスの上に

主に四つの国にまたがって暮らすクルドの人は、こうした問題に長いこと苛まれてきました。それでも、彼らを取り巻く状況は少しずつ改善されてきています。トルコでは先ほども述べたように表面的といった指摘があるものの、法律が改正され、人権問題への取り組みが始まっています。最近では、限定的ではありますが、クルド語の放送が認められ、クルド語を教える授業も行われるようになりました。

イラクでは、過去に受けた弾圧を発端とする傷や病、トラウマといったものは、今も深刻ですが、1992年の自治区成立以来、都市部を中心に生活の状況はずいぶんよくなっています。2003年に米国の先制攻撃で始まったイラク攻撃の際も大きな混乱はなく、その後は目覚ましい経済発展を遂げ、今も建築ラッシュに沸いています。しかし民族や宗派間の対立は相変わらず根深く、キルクーク、モスルといった大産油地の帰属問題をめぐってはさらに対立は深まっており一触即発の状況です。

長年にわたって自分たちを苦しめてきたサダムから解放されたイラクのクルド人ですが、市民たちの見せる態度は慎重です。「クルド人自治区と隣接するトルコ、イランなどのクルド人内包国家



写真⑰ 女性市民活動グループのリーダー

は、自国内のクルド人が勢いづくことを恐れ、自治区が独立へと向かうこと懸念している。自分たちが今の安定した暮らしを送り、生き残っていくには、独立の野心を見せてはならない」。

クルド人たちは自国の政府から弾圧され、その事実は国家の力で隠蔽されてきました。国民でさえ本当のことを知らされず、知る機会もなく、プロパガンダに流され、国家が治安維持という名目で行ってきたクルド人対策やクルド人について誤った認識を鵜呑みにし、そうした中で、人々は隣人に対する偏見や嫌悪感といったものを助長させてきました。大きな戦闘が見られなくなった現在、クルド人たちの多くが、そうした誤解や蔑視をなくすことと安心して暮らせる社会が続くことを何より望んでいると言います。そんな時に彼らが見せる苦悩の表情と、強い意志のにじむ視線が、今も思い出されます。



写真⑱ イラクのショッピングセンター

翻弄の歴史を辿ってきたクルディスタンとクルドの人たち。今に見る彼の地の平穏さも、国境地帯という不安定地域の、各国間の危ういバランス

の上に成り立っているということを、忘れるわけにはいきません。